

昭和二十一年三月二十一日、ラバウル出帆、四月に内地に帰りました。上陸したのは神奈川県浦賀でした。

帰る時、二〇〇円ぐらいもらった記憶があります。が、駅の付近で、腹が減ったのでうどんを食べたりしたら無くなってしまいました。駅で、浦賀から山陰線の倉吉までの切符をくれました。また「兵隊さんご苦労さん」といってパンもくれました。

私は内地へ帰っても金も無し、職も無しでしたが、工兵の時に教わった自動車の運転を職業とし、徐々に仕事を広げ、今は会社として土木建築を業としています。

工兵隊として随分厳しい教育を受け、北支、ラバウルと転戦し、この苦勞が今の私を作り、事業を作ったと思っっているのです、戦友との関係を大切にしている今日です。

### 第三十六師団（雪兵团）

#### 東部ニューギニア戦

山形県 石塚 代次

私は昭和十七年十二月一日、第三十六師団要員として現役入営、中国大陸山西省の部隊に着いたのは十二月十六日でした。山西省の通信隊本部で教育を受け、通信兵として一期の検閲を無事終了し、有線兵として勤務に就いていました。

北支は、ご承知のごとく共産軍の勢力が強く、八路軍との戦闘も三回程体験しました。通信兵は戦闘部隊ではなく、隊と本部、隊と隊の間に線を引いて通信するのです。従って、有線敷設の距離は長く、その間を守るのはほとんど自分たちでしなければなりません。兵器を持たぬ通信兵は度々敵の襲撃を受けたり、線を切断されることがあるので、戦闘部隊には無い苦勞の連続であるばかりか、襲撃され犠牲者が出ることも

度々ありました。この危険は警備駐屯中も作戦・討伐  
中も度々ありました。

我々の部隊は、第三十六師団（雪兵団）ですが、昭和十八年頃になると南方の戦線は日本軍にとっても困難な戦況となってきました。これがため在支師団のうち多くの師団が南方に転出していきました。我が師団は東部ニューギニア、臺北派遣軍に転属しました。

第三十二師団（楓兵団は同様にハルマヘラ）、第十三師団（弓兵団はビルマ、インパール作戦に）、第三十五師団（東兵団は臺北）、第三十八師団（沼兵団は香港攻略、インドネシア↓ガダルカナル↓ラバウル）、第四十一師団（河兵団は東部ニューギニア）、第五十一師団（基兵団も東部ニューギニア）と大陸から、次々と転属してしまいました。

我が師団は、昭和十八年十月十八日上海を出帆、私は十二月一日、幸いにして第一選抜の上等兵に進み、十二月二十八日、ニューギニアのサルミ湾に上陸し、昭和二十一年六月三日復員までの間、ニューギニアで孤立した戦闘を続けていました。

サルミ湾といっても棧橋程度のものが少しある程度です。従って輸送船は沖に停泊し、我々はボートに二〇人ぐらいずつ乗っての上陸ですから、全員が上陸するには一晩かかりました。なにしろ昼は空襲があるかもしれないぬから暗い所での作業なので大変でした。

上陸しても兵舎など何も無いから、船からの荷揚げが終了するまで、海岸端での天幕生活でした。テント生活の次はジャングルの中から樹を切り出して幕舎を建てます。屋根は幅広い葉を蔓で編んで葺きました。が、僅かな期間は空襲もなく助かりました。その後、日本軍が上陸したことを知った米軍の空襲が開始されました。

内地から持ってきた砲などの兵器、弾薬は、昼間の空襲、夜間の艦砲射撃でほとんど失いました。サルミへの空襲は昭和十九年四月二十一日から開始され、先に申したように朝暗いうちより航空機によるサルミ基地の銃・爆撃、夜になると海上より軍艦の艦砲射撃です。

我が師団は、上陸後の空襲で多くの火炮を失い、し

かも、軍艦の砲の口径は陸軍のそれとは雲泥の差があるから、とても対抗することは出来ません。子供と大人のケンカです。口惜しいが艦砲には対抗も出来ません。しかも、飛行場を三つ造りましたが一、二回使った程度で爆撃を食らって使えなくなってしまうました。敵は上陸はして来ませんでした、岩手連隊の守備していたビアク島に連合軍が上陸したのは、昭和十九年五月二十七日でした。その後、同連隊は葛目連隊長以下玉碎したのです。

サルミの我が部隊は劣勢の火力で連合軍の上陸を阻止していましたが、それにも増しての労苦は食糧の欠乏でした。ニューギニアには食糧の輸送はなく、現地自活を余儀なくされていきました。原住民が植えているサンゴ椰子の澱粉質が主食でした。幹を叩いてその中の澱粉を溶かし、澱粉を取り、それを葛湯のようにし、醤油を付けて食べました。美味とは言えぬが、食べねば栄養が取れません。このようにして六カ月間はサンゴ澱粉と、ジャングルの中の草や葉で命を繋ぎました。

その後、ジャングルを耕してサツマイモを植えることになりました。種芋はどこから持ってきたのか知らぬが、この芋が収穫されるようになり、ようやく命を繋ぐことが出来ました。また野生か、原地人の栽培したものが知らぬが、タピオカという芋も主食とするようになりました。塩は岩塩だけであり、携帯口糧の味噌、醤油での味付けだけでした。美味しかったのは海岸に打ち寄せられた魚、ふぐなどでした。

食糧の採取や増産は生きていくために必要な作業ですが、私は通信隊であったので、それらの作業には従事せず、もっぱら師団と連隊、連隊と大・中隊間の通信業務に精を出していました。毎日というような空襲による銃・爆撃で、通信網が切断、破壊されます。その間、危険を冒しての復旧作業、保線要員としての任務が重要でした。そのため、私は最後の最後まで有線の保線をしていました。そして終戦となり、米軍が上陸して来て、米軍基地から我が軍の師団司令部までの線を張ったり、補修作業をしていました。そして、それが私の軍人としての最後の仕事でした。

今にして思えば、昭和二十年八月十四、十五日頃であつたでしょう。それまでは毎日のように空襲があつた連合軍の定期便がその頃来なくなり、不思議に思へました。仲間同士で「最近あまり飛行機が来ないな」と言っているうちに一機が来ました。我々が「また来た」と退避しているうちに、爆撃でなく通信筒を落としたのです。宣伝の伝単ではない通信筒の中の文で終戦になったということが判りました。

終戦というのが部隊全部に行き渡るまでは二週間ぐらいかかりました。終戦を知った私も隊の皆も「これで駄目なんだ」と思いました。降伏したというからです。この時我々は「降伏した後、どうしようか」と迷いました。日本軍には降伏の文字もないし、そのようなことを思ったことはなかったからです。ある者は「奥地に入って原住民と暮らそう」またある者は「自決しよう」との意見でした。

とにかく、昭和十八年十二月二十八日、このサルミ島に上陸以来、空襲と艦砲射撃に耐え、餓えをしのいできて、多くの戦友を失っています。通信隊二五〇人

の中でも犠牲は多く、ある時は一日に七、八人ずつ死んだこともあります。そのたびに火葬にすることは出来ないで、幕舎の裏に穴を掘り、死体を毛布に包んで埋めてきました。

数年前、通信隊長と教官等が現地遺骨収集に行きましたが、戦争中の場所は五十余年を経過し、やはり変わっていて、なかなか所在は判りにくかったといいます。無理ないことですが、我が第三十六師団の犠牲は多く、内地へ還ることの出来た将兵は三分の一以下だったといえます。このように豪北派遣軍の損害は極めて大であつたのです。私達の戦友の遺骨も未だに送還されることもなく、ニューギニアの地に、あるいは海底に沈んだままです。

我々の部隊は昭和二十一年六月三日、サルミを出発、LSTで名古屋に着いたのは六月十日頃でした。復員式を終え、名古屋から山形まで一般車両で帰りましたが、乗っている人達は「今回の兵隊さんはずいぶん顔の色が悪い」とささやいているのを耳にしました。

いま私は故郷に帰り、牛四〇頭を飼って農協の理事などしておりますが、通信隊の仲間と毎年寄って、隊長以下十二、三人（山形、岩手、秋田、青森Ⅱ第八師団管区）集まり、また秋の靖国神社での臺北派遣軍慰霊祭に参列しております。

### 【解 説】

#### 第三十六師団（雪兵团）

師団司令部Ⅱ師団長 田上八郎中将

参謀長 今田新太郎少将

参謀 二宮義雄中佐、梶原俊夫少佐、花見侃少佐

歩兵第二二二連隊長 葛目直幸大佐（ビアク島主

碎）

歩兵第二二三連隊長 吉野直靖大佐

歩兵第二二四連隊長 松山宗右衛門大佐

第一大隊長金田秀夫大尉、第二大隊長川島全大尉、

第三大隊長土井初太郎少佐、第三十六師団戦車隊、同

通信隊（大西孝雄大尉、間瀬三郎少佐）、同輜重隊、

同海上輸送隊、同兵器勤務隊、同経理勤務隊、同野戦

病院

同師団は昭和十四年三月弘前師管区で編成され、同年四月渡支後、北支で連続作戦に参加。引き続き臺北へ転進した。補充留守業務は弘前師団である。従って青森・岩手・秋田・山形県が主であった。

支那から出発するに当たっては、海洋編成師団に改編された。

第三十六師団ビアク玉碎の葛目部隊を除いた、吉野・松山部隊等の上陸人員は八三五二人、内生存者二六五四人であり、実に五六九八人が戦没しているのであり、その犠牲は多大であった。

特に松山連隊（歩兵第二二四連隊）は三三三七人中生き残り人員は僅か六二五人であり、生存率は十八・六％である。通信隊が毎日のように七、八人死んだという証言を裏付けている悲惨な戦場であった。

なお南方の部隊には「兵補」といわれる軍属に準じた日本人や、台湾人、インドネシア人が相当含まれて

いた。第三十六師団においても、日本人四四一〇人、  
うち生き残り一〇六四人（約四分の三死亡）、台湾人  
一七五〇人、うち生き残り五七七人（約三分の二死  
亡）、インドネシア人一七〇一人、うち約四〇〇人逃  
亡、生存一八三人、死亡二二二四人である。